

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：14301  
 研究種目：基盤研究(A)  
 研究期間：2011～2014  
 課題番号：23251004  
 研究課題名(和文)ユーラシア大陸辺境域とアジア海域の生態資源をめぐるエコポリティクスの地域間比較  
  
 研究課題名(英文)Comparative Area Studies of Eco-politics Over Eurasian Continent Frontier and Maritime Coastal Area Eco-resources  
  
 研究代表者  
 山田 勇(Yamada, Isamu)  
  
 京都大学・東南アジア研究所・名誉教授  
  
 研究者番号：80093334  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 39,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ユーラシア大陸辺境域と海域世界を対象に、稀少生態資源の変容を解明し、変貌と持続性の共通性を探ることによって両地域の実像を把握することにある。沈香等の森林資源、ナマコ等の海産資源、乳製品等の牧畜資源は、近代化に伴う乱開発、中国等による収奪、国際条約等により、脆弱化・枯渇化し、危機的な状況に陥っている。生態資源の保全と利用の両立、地域外からの無秩序な影響力の抑制が緊急に解決すべき至命題となっている。両地域に見いだされた概念は、大国の中心社会と小国のネットワーク社会という社会機能的枠組みである。近未来の生態資源のために必要なのは、ネットワーク社会のハビトゥスとしての共生社会である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the changing process of eco-resources in the remote area of Eurasian continent and Asian maritime world and to find the characteristics of both areas. For instance, agarwood in tropical forest resources, sea cucumbers in maritime world, milk products in pasture resources are precious resources which have been over exploited after the 2nd world war and getting scarce and difficult to manage by the pressures from large countries and international treaties. We have to secure those resources sustainably by bottom up efforts of the local people. In four years, field works have been done in many remote areas and found good examples of sustainable way of resource management by the small network societies. Roles of the harbor cities like Hong Kong, Singapore and Bangkok are extra important for the future management of eco-resources. Results were published in 20 books and over 100 papers.

研究分野：熱帯地域研究

キーワード：生態資源 エコポリティクス 地域間比較 ユーラシア大陸辺境域 アジア海域 エコツーリズム ワシントン条約 港市

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の地域は二つの大きな生態域に分かれる。ひとつは高山、乾燥地とモンスーン林の大陸辺境部、もうひとつは湿潤な熱帯海域世界である。生態学的に異なる両地域を個別に研究した例は多いが、地域間比較研究の立場から研究したプロジェクトは存在しない。たとえば、ユーラシア大陸辺境域では、古くはヘディンに始まり、考古学、歴史学、生態学、人類学の分野などで多くの研究蓄積がある。最近では、総合地球環境学研究所をはじめ、東大、京大、名大、民博などによるヒマラヤを中心とした研究があり、また中国でも尹紹亭の雲南の焼畑における研究など優れた業績がある。

しかし、これらにも、本研究課題である「生態資源のエコポリティクス」という視角はみられない。他方、海域においては、リードやウォレン、濱下武志の交易史研究に始まり、鶴見良行や村井吉敬、早瀬晋三、京大東南アジア研究センターなどの研究蓄積がある。なかでも Flora に関しては *Flora Malaysia* 等のモノグラフが提出されている。しかし、生態資源利用を扱ったものは少なく、古くはパーキルの事典に始まり、最近では PROCEA や内堀基光の特定領域研究「資源人類学」にまとまった記述があるのみである。

## 2. 研究の目的

ユーラシア大陸辺境域（中国中南部、東南アジア北部、インド北部、中央アジア中西部、西アジア乾燥域）とアジア海域世界は、現代のグローバリズムの影響をもっとも強く受けている地域である。しかし、なかには、伝統的な生活を守りつつも、地域の生態資源を掌握し、利用し、グローバル化に対応しながら、柔軟に生きる人びとが多いことも事実である。

本研究の目的は、こうした人びとと生態資源に焦点を当て、沈香、マツタケ、木材、コーヒー、ナマコ、牧畜等の資源をとりまく変容過程を明らかにした上で、ワシントン条約などの国際条約や国立公園策定などといった国家からの規制に対する住民サイドからの反応を通じ、小地域の投げかける新たな方向性を見だし、生態のまったく異なる二地域における共通性を探ることによって、両地域の実像を浮かびあがらせることにある。

## 3. 研究の方法

本研究は、ユーラシア大陸辺境部と海域アジアにおいて、広域調査と定着調査を行い、それぞれにおいて、沈香、マツタケ、染料源、コーヒー、茶、燕巣、人参、各種小型林産物、材木、ナマコ、ハタ、マグロ、貴重動物、乳製品など特徴ある生態資源の調査を実施し、戦後から現在にいたる生態

資源の動きと周辺のエコツーリズム、国家規制、国際条約などの影響を調べる。

さらに、ワシントン条約などの国際会議に出席し、現地調査の成果をふまえた提言をおこない、現地住民と国際条約の橋渡しの役を担う。とくに同条約の附属書 II に掲載されている沈香については、これまでの研究成果を活かし、実践的植林と沈香成分抽出指導をおこなう。また、大陸班と海域班相互にのり入れる機会をつくり、両地域の交流が可能な素地を創出する。

## 4. 研究成果

稀少生態資源に関する現地調査

以下がメンバー4年間の活動概要である。

### ・山田 勇

稀少生態資源の沈香については、ここ四半世紀の間でもっとも大きな動きがみられた。すなわち原生林の伐採による資源の枯渇により主産地がボルネオからニューギニアへ移った。中国の富裕層が沈香に関心を示し始めた結果、2012年には価格が生物資源としては朝鮮人参を抜いて最高値に達した。しかしその後、中国の政治的動向により値下がりをはじめている。

ユーラシア大陸山地域では、中国やロシアの影響が強くなり、大国の動きによって資源の価格が左右されることになり、小農民は苦慮している状況を把握した。

熱帯アジアでは原生林の伐採後、オイルパームや早成樹種、沈香などの植林が広く行きわたり、かつての伐採地に新たな地場産業が広く見られるようになった。さらにワレシアや太平洋上の島々では独自の資源保全を徹底し、きわめて持続的な管理がおこなわれている状況にある。

これらの地域の中で大きな役割を果たすのが香港、バンコク、シンガポールなどの港市であり、今後は華人による経済活動がいかに資源保全に寄与できるかが課題となっている。

### ・阿部 健一

ティモールでの珈琲栽培とその紹介を10年以上にわたり続ける中で、現地の農民を日本に招へいし、日本の消費者が求めているのは無農薬・環境保全型珈琲であることを再認識することによって、原生林を切り開くことへの歯止めがかかったことが特筆される。また比較調査としてフィリピンのミンダナオ島北部のバギオ周辺の珈琲栽培を調査した。そこでの問題は10年前のティモールと同様である。すなわち適切なポストハーベスト処理不足により、品質、市場競争力が向上しないという課題である。結果、先住民たちが現金収入に直結するハヤテウリの栽培の拡大をめざして原生林伐採をすすめていることが憂慮された。環境教育やアグロフォレストリーによる持続的栽

培を広めていくことが必要であり、ティモールとミンダナオを結ぶ、すなわち南と南の連携による強いコミュニティ育成の可能性を今後探ることになる。

・竹田 晋也

東南アジア・南アジアの大陸辺境域で森林土地利用とその変容について調査をおこなった。ミャンマーのバゴー山地での研究では、カレンの人びとが小規模の自給用焼畑陸稲を栽培してきた。そのような場で、近年、政府による土地政策変化の結果、各世帯は将来の土地所有権確保を期待して、谷地田造成による水田水稲作、谷地田周囲の斜面にチークやピンカドーなどを植樹して「水田アグロフォレストリー」が展開するように変貌した。ミャンマーの奥山山村・里山農村においても、政府権力との間で持続的な森林資源利用と地域社会便益性の課題が社会問題化している。

ラオス北部ルアンパバーン県S村での調査では、焼畑全筆を実測し、世帯調査ならびに衛星画像と関連づけて焼畑土地利用を地図化し、市場情報と合わせて、近年の焼畑システムの変化について考察した。トムロコシ国際価格は、経済成長による畜産物需要が旺盛な新興国の需要増大や、バイオ燃料生産の拡大などの構造的な要因によって押し上げられている。S村では、仲買業者と生産グループが契約を結び、トムロコシ集荷園に組み込まれたことで、従来の陸稲焼畑システムから、連作、草地休閑、叢林休閑の3つを組み合わせた焼畑システムへと変化している状況にある。連作は植生を脆弱化させる。ラオス北部の焼畑地域の事例は、短期的には収益をもたらすが、長期的には地域の持続的な食料生産活動を崩壊させていく市場経済化の問題性を如実に指し示している。

・市川 昌広

東南アジア新興国の農村から都市への移住に伴う、農村機能の衰退、農業離れについて焦点を当て、マレーシア・サラワク州を中心に農村の現況調査および都市へ出てきた農村出身者の暮らし方について調査をおこなった。サラワク州のクメナ川河口の町のまわりには原生林や二次林が広がっていたが、1980年代より工業地区やショッピングモールが建設され、その建設やそこでの仕事に携わる人々が急速に増加した。中でも、森林生態系に育まれて農耕をおこなってきたイバンの人びとも数多く含まれていた。幹線道路建設がポート移動のための川沿い居住の必要性も欠落させたこともあり、人口流出に拍車をかけ、ロングハウスでの生活が機能しなくなった。都市部では、親戚関係の無いあるいは非常に希薄な人々による「寄せ集まり」現象が生じてしまった。サラワク州の事例は、近代化による無秩序な急激な都市部建設が、農村を根底から衰退させ、伝統文化の多くを

崩壊させていることを指し示している。

・赤嶺 淳

鯨類や板鰓類魚類などの稀少生態資源について国際的規制枠組み、利用と保全の両立の可能性について調査研究した。2011年度は8月にマルタ共和国において、ワシントン条約第15回締約国会議で注目を浴びた地中海における大西洋クロマグロの養殖/畜養と、巻網漁に関する調査ならびに関連施設へのシーシェパード等による妨害活動についての聞き取り調査を実施した。2012年度は、パナマ市で開催された第64回国際捕鯨委員会に出席し、鯨類管理のエコ・ポリティクスの参与観察をおこなった。2013年度はノルウェーのサンデフィヨルドにある捕鯨博物館で開催された「第4回捕鯨と捕鯨史に関するシンポジウム」に参加し、世界の捕鯨史研究の最前線についての情報を収集した。2014年度はノルウェー大学とオスロ大学にてノルウェー政府の国際捕鯨委員会・科学委員であるArne Bjorge先生ならびにLars Walløe教授と面会し、ノルウェーの捕鯨政策と資源管理についての情報を収集した。ニューベッドフォードの捕鯨博物館において、米国におけるノルウェー式近代捕鯨関係史料をも収集した。

これらの調査活動により、海域世界における稀少生態資源についての国際条約の最先端の現状と動向を把握することができた。今後、これらの利用と保全の両立、政府間パネルの協議や交渉に対して積極的に発言し、これらの成果を還元していくことが課題である。

・落合 雪野

ラオスの染織文化に関連する稀少生態資源、とくに染料植物に着目して研究を実施した。その結果、ラオスでは、染色素材は国内市場向けには化学染料を、国際市場では植物染料を使用した製品が高価格で取引される現状に陥っていた。このような状況のもと、植物染料で染めた、手紡ぎ手織りの布であることを明確に価値づけし、高品質の「本物」として差別化したうえで、布の生産をおこなうといった団体や個人が新しく出現してきている。

一方で、すでに植物染料の使用が途絶えた集落にあっては、政府や団体などの支援を受けて講習会が開催され、いったん染料植物や染織技術が標準化された上で各地に拡散するという状況が確認された。更に、単に布を生産するだけでなく、生産の現場に観光客を招き入れてそのプロセスを公開し、染織体験を組み合わせるなどしたエコツーリズムが、都市の工房や地方の集落で展開している。このように、ラオスの染料植物とその関連技術についての稀少生態資源は、大国の購買力と近代化とにより新た

な局面を迎えており、保全と活用の両側面から、今後も注意深く動向を追い続けていく必要がある。

・平田 昌弘

乳文化という軸から、牧畜という稀少生態資源を分析するために、アフロ・ユーラシア大陸各地で調査を実施した。4年間での調査地は、エチオピアやキルギス、モンゴルなど、16地域にも及ぶ。それぞれの地域で乳加工技術と乳製品の利用法について調べ、近隣集団との文化伝播・変遷の関係をも分析した。その結果、仮説「ユーラシア大陸における乳文化の一元二極化論」を提起するに至った。ここに、人類が約1万年かけて蓄積した稀少生態資源である乳文化についての集大成が確立するに至った。

この仮説は、乳文化が西アジアで一元的に生じたこと、西アジアから周辺に伝播し、北方域で冷涼な生態環境の基に特徴的に変遷したことを指し示すものであり、乳文化の成果から牧畜論への大きな提言ともなりえる挑戦的な内容を内包している。

・長津 一史

島嶼部東南アジアの海民社会を対象として、稀少海産資源利用のあり方、および同資源をめぐるローカル・ネットワークそれぞれの持続と再編の過程を、中国や拠点都市の資源市場の変動、近代国家(群)による資源の囲い込み、それらのインパクトをふまえつつ、植民地期から現在に至る長期の時間幅で辿り、そこに形成されてきた海民社会の特徴を明らかにすることを目的に調査研究をおこなった。その結果、異なる出自の人々が交易や商業の機会を求めて恒常的に交雑し、共生的な関係を築きつつ、しばしばクレオール的な集団を生成することが把握された。これらの社会のあり方では、集団どうしの関係において在地住民の地位や、言語をはじめとする在地の文化要素が特権化していないことである。何より住民の移住・移動と、それにともなう民族間の通婚が常態化しているため、在地性の概念じたいが有効性を有していないように考えられた。

このように、海民のプロトタイプの性向として離散移住傾向の強さは、海民の社会空間において民族間の混淆が展開し、継続する基本条件になってきたと結論することができた。

・鈴木 伸二

東南アジア地域のエコ・ポリティクス、とりわけ生態資源に対する政治に焦点をおいて調査を行った。まず、エコ・ポリティクスの歴史的な変遷を明らかにするため、公文書館や資料館などで資料を収集した。また現在、どのような森林政策が行われているのかも現地調査した。これらによってエコ・ポリ

ティクスが生じる歴史的な経路依存性を明きかすことを目的とした。

東南アジア大陸部におけるエコ・ポリティクスの歴史的な変遷を理解するため、イギリス、タイ、ミャンマー、シンガポールで森林政策に関する文献資料の収集に当たった。また、現在の森林政策に関してはベトナムにおいては臨地調査を行った。その結果、英領ビルマの森林政策は少数民族統治とも密接に係っており、これが独立後の内戦と森林破壊の元凶となっていた。また、英領ビルマでは林学にもとづいた森林管理を指向する森林局と、自由主義貿易の論理で森林開発を行おうとする企業とのせめぎ合いが継続していた。とりわけ、1863年に設立されたボンベイ・ビルマ貿易会社は本国でのロビー活動を通じて英領ビルマの森林開発に大きな影響を及ぼしていた。また、ボンベイ・ビルマ貿易会社は隣国のタイにも進出して、タイの森林開発に多大な影響を与えていた。

また、独立後のミャンマーでは政府も少数民族勢力も森林資源を利用して内戦を継続させた。政府はカレン族やカチン族の支配地域の森林をタイや中国の企業に伐採権を与えロイヤリティーを得た。一方、カレン民族同盟やカチン独立機構も独自に林業省を設立してロイヤリティーを徴収した。内戦の道具として森林伐採権が利用され、それがミャンマーにおける森林の荒廃をもたらしていた。

このように、森林資源をめぐるエコ・ポリティクスは旧宗主国の植民地政策によって、その後も異なる経路の中で形成されることが明らかとなった。

#### 大陸辺境域と海域世界の地域間比較

4年間の調査では、これらの主だった地域を詳細に調査することができ、森林資源、水産資源、牧畜資源をめぐる人々の動態が明らかになった。そして資源の少ない地域では持続的な方策がいきわたる一方、資源の豊かな地域では攪乱が激しく、大規模な生業の変化がみられる。

また、ユーラシア大陸辺境域とアジア海域世界を越えた共通性が発見された。それは、明確な核と枠組みを備えた大国の「中心社会」、これと対照的に、核が流動的で、輪郭が曖昧な、個人どうしのネットワークの連鎖を社会関係の基盤とする小国の「ネットワーク社会」である。中心社会では周辺小国を下層として中心から排除する階層化が進行し、ネットワーク社会においては「多様な文化相があっても厳しい上下関係が少ないモザイク型の共生」が維持されていく。「中心社会」は、専制的で柔軟性の低い人工的多文化共生社会をつくりだしていくのに対し、「ネットワーク社会」の特徴は混淆で共生した社会構造となる。この対比構造は、海域世界だけでなく、大陸辺境域にも共通していることが、本科研で明らかとなった。排他

的で利益至上主義が進む現在社会に求められているのは、後者のネットワーク社会の人の身体に刻まれたハビトゥスとしての共生社会である。

大陸辺境域と海域世界での今後の大きな課題は、中国、ロシア、EUなどの大国がいかに資源に関わってくるかである。地域に根ざす地元の伝統的な生業が大国による圧力からいかに生き延びられるかが緊急の課題となっている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計129件)

- ・山田勇(2011): ブータンはなぜ人をひきつけるのか「科学」81, No.6. 589pp 特集: ブータン 環境 と 幸福 の国
- ・Tri Mulyaningsih, Djoko Marsono, Sumardi, Isamu Yamada (2014) " Selection of Superior Breeding Intraspecies Gaharu of *Gyrinops versteegii*(Gilg) Domke, " *Journal of Agricultural Science and Technology B* 4(6):485-492, (Serial Number 38)David Publishing Company (査読あり)
- ・赤嶺淳(2014)「環境問題とむきあうモノ研究からマルチ・サイテット・アプローチへ」, 『地域研究』14巻1号: 139-158. (査読あり)
- ・赤嶺淳(2013) " Whale meat foodways in the contemporary Japan: From fish sausages in the 1960s to whale tongue dishes in the 1990s, " Proceedings of the International Conference on Food and Heritage: A Perspective of Safeguarding the Intangible Cultural Heritage, January 3-5, at the Hong Kong Heritage Museum, Hong Kong: Chinese University, pp. 76-91.
- ・平田昌弘、板垣希美、内田健治、花田正明、河合正人、2013. 「古・中期インド・アリア文献「Veda 文献」「Pali 聖典」に基づいた南アジアの古代乳製品の再現と同定」『日本畜産学会報』84(2): 175-190.(査読あり)
- ・平田昌弘、鬼木俊次、2012. 「エチオピア中高地における定住化牧畜民の移動性と旱魃への対処戦略 エチオピア北東部 Afar 州と南部 Oromia 州の事例」『帯広畜産大学研究報告』33: 87-99.(査読あり)
- ・平田昌弘、2012. 「チベット高原西部におけるチベット系ラダーク牧畜民カルナクパの季節移動システム インド北部ヒマラヤ山脈西部北斜面チャンタン地域カルナクパでの事例から」『ヒマラヤ学誌』13:113-127.(査読あり)
- ・平田昌弘、2011. 「モンゴル高原中央部における家畜群のコントロール 家畜群を近くに留める技法」『文化人類学』76(2): 182-195.(査読あり)
- ・Masahiro Hirata, 2013. Flooding and flood damage in the Gya-Miru area. In N. Ikeda,

T. Tsukihara and M. Nose(eds.), *Research report on the August 2010 flood disaster in Ladakh*, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), Kyoto, pp. 85-92.

- ・Ichikawa, M., , A. Ricse, J. Ugarte, S. Kobayashi. 2014. Migration patterns and land use by immigrants under a changing frontier society in the Peruvian Amazon. *TROPICS*. 23(2). 73-82. (査読あり)
  - ・Takeda, S. Local management of forested wetland in tropical Asia. *Journal of Agroforestry and Environment* 5(special issue) 27-29 2011 (査読あり)
  - ・Takeda, S. Swidden farming and monsoon forests of mainland Southeast Asia: A patchwork of disturbance and succession. *Journal of Agroforestry and Environment* 5(special issue) 7-10 2011 (査読あり)
  - ・竹田晋也・宮川修一インド東部ジャールカンド州ムンダ村落のラック生産と産米林景観. 『熱帯農業研究』8(suppl.1) 87-90 2015
  - ・落合雪野 2012 「ジュズダマ属にみる人と植物の関係」日本植物分類学会編 『植物分類学 新しい分類体系と研究のあゆみ』講談社:205-209. (査読あり)
  - ・OCHIAI Y. 2012 " From forests to home gardens: A case study of *Ensete glaucum* in Myanmar and Laos " , *TROPICS*, 21(2): 59-65. (査読あり)
  - ・阿部健一 2014年07月「自然と人間の関係を考える」コモンズ-小さくて大きな物語 *HUMAN* vol.6 p131-140
  - ・長津一史 2012 「『海民』の生成過程 インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として」『白山人類学』15: 45-71. (査読あり)
  - ・長津一史 2013 「東インドネシア、海民の社会空間 ゲセル島で村井さんと考えたこと」『ワセダアジアレビュー』14: 31-34. /
- [学会発表](計123件)
- ・Yamada, I (2011): Wise use of poor resources and mismanagement of rich resources: Comparative eco-resource utilization history in the tropics and the mountains 『消えゆく森、生まれ変わる森 森の近代を問う』2012年1月29日 大阪市立大学文学研究科重点研究シンポジウムエル大阪 70
  - ・Akamine Jun " Potential for sustainable use of sea cucumbers in Malaysia: Toward Inclusive Dialogue for Sustainable Sea Cucumber Conservation in Malaysia, " paper read at the 13th API Regional Workshop in Hiroshima, International Conference Center Hiroshima on Nov. 10, 2014.
  - ・Masahiro Hirata, Monogenesis -Bipolarization of milk culture in the Eurasian Continent. International Conference of IUAES (the International

Union of Anthropological and Ethnological Science) 2014 with JASCA (The Japanese Society of Cultural Anthropology), 15 - 18 May 2014, Makuhari Messe, Chiba, JAPAN.

・ Ichikawa, M., 2014. 6.18. "Applying Japanese experience to rural community degradation caused by rural-urban migration in Sarawak" (Keynote speech) Society for Design and Process Science 2014. Pullman Hotel Kuching, Malaysia.

・ Shinya Takeda, Takayoshi Yamaguchi "Changing Land Use and Water Management in a Ladakhi Village of Northern India." : 1st International Conference on Asian Highland Natural Resources Management, Asia High land 2015, Chiang Mai 2015年1月

・ 鈴木伸二. 2014.12.20. 「荒廃から再生へ：ベトナムのマングローブ湿地から」(『東南アジアと日本の生態資源を里山・里海の視点から見る』金沢大学里山・里海プロジェクト) 「ぎふグローバル人材育成推進モデル事業」フォーラム

・ 長津一史 2012 "Genealogy of the Maritime Creole and its Socio-ecological Settings in Wallacea," Asian CORE Program Seminar "Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia," 28-29 February 2012, Taipei: Academia Sinica.

〔図書〕(計73件)

・ 山田勇 2012 『世界の森 大図鑑 耳をすませ、地球の声に』 新樹社 532頁.

・ Akamine Jun 2013 *Conserving Biodiversity for Cultural Diversity: A Multi-sited Ethnography of Sea Cucumber Wars*, Hatano: Tokai University Press, pp. 286. (日本学術振興会科学研究費助成事業研究成果公開促進費)

・ 平田昌弘、2013. 『ユーラシア乳文化論』 岩波書店、485頁.

・ 市川昌広・祖田亮次・内藤大輔編著. 2013. 『ボルネオの里の環境学 - 変貌する熱帯林と先住民の知』. 昭和堂、227頁.

・ 落合雪野編著 2014 『国境と少数民族』めこん、237頁.

・ 阿部健一編著 2012 『生物多様性 子どもたちにどう伝えるか』 昭和堂、205頁.

・ 長津一史 2013 「移動と混淆 バジャウ人の世界」 『現代インドネシアを知るための60章』 村井吉敬ほか(編), 明石書店、28-30頁.

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田勇 (YAMADA, Isamu)

京都大学・東南アジア研究所・名誉教授

研究者番号：80093334

(2) 研究分担者

赤嶺淳 (AKAMINE, Jun)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：90336701

阿部健一 (ABE Ken-ichi)

総合地球環境学研究所・研究高度化支援センター・教授

研究者番号：80222644

市川昌広 (ICHIKAWA Masahiro)

高知大学・自然科学系・教授

研究者番号：80390706

落合雪野 (OCHIAI Yukino)

鹿児島大学・総合研究博物館・准教授

研究者番号：50347077

鈴木伸二 (SUZUKI Shinji)

近畿大学・社会学部・講師

研究者番号：10423013

竹田晋也 (TAKEDA Shinya)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号：90212026

長津一史 (NAGATSU Kazufumi)

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：20324676

平田昌弘 (HIRATA Masahiro)

帯広畜産大学・畜産学部・准教授

研究者番号：30396337